



日本文学全集
38

三島由紀夫

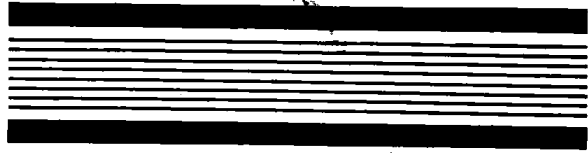


仮面の告白・潮騒・金閣寺
美德のよろめき・鹿鳴館

河出書房



三島由紀夫



カラー版日本文学全集 38

1968©

昭和四十三年二月二十日 初版印刷
昭和四十三年二月二十五日 初版発行

定価 七五〇円

著者 三島由紀夫

発行者 河出朋久

印刷者 草刈親雄

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

三島由紀夫

仮面の告白 五

潮騒 七

金閣寺 一五

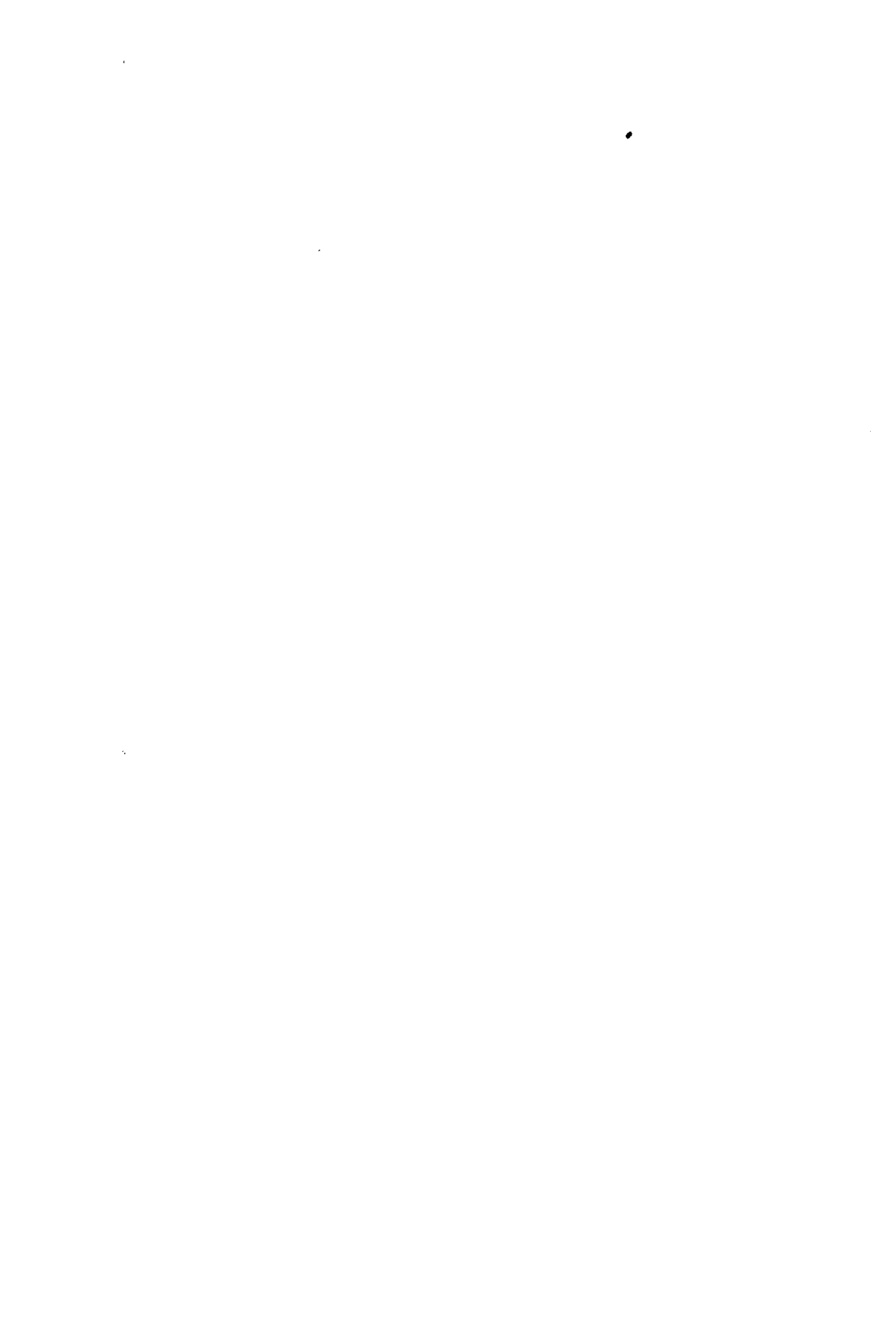
美徳のよろめき 二六五

鹿鳴館 三三三

色刷挿画	巻頭写真	解説	年譜	注釈
潮騒・金閣寺	美徳のよろめき	仮面の告白		
上原卓	久保守	本社写真部	吉田健一	山口基
				保昌正夫
				三三
				三九
				四二

三島由紀夫

仮面の告白*



美——美という奴は恐ろしい怕かないもんだよ！ つまり、杓子定規に決めることが出来ないから、それで恐ろしいのだ。なぜって、神様は人間に謎ばかりかけていらっしやるもんなんだ。美の中では両方の岸が一つに出会って、すべての矛盾が一緒に住んでいるのだ。俺は無教育だけれど、この事はずいぶん考えぬいたものだ。実に神秘は無敵だなあ！ この地球の上では、ずいぶん沢山の謎が人間を苦しめているよ。この謎が解けたら、それは濡れずに水の中から出て来るようなものだ。ああ美か！ その上俺がどうしても我慢できないのは、美しい心と優れた理性を持った立派な人間までが、往々聖母の理想を懐いて踏み出しながら、結局悪行の理想をもって終るといふ事なんだ。いや、まだまだ恐ろしい事がある。つまり悪行の理想を心に懐いている人間が、同時に聖母の理想をも否定しないで、まるで純潔な青年時代のように、真底から美しい理想の憧憬を心に燃やしているのだ。いや実に人間の心は広い、あまり広過ぎるくらいだ。俺は出来る事なら少し縮めてみたいよ。ええ畜生、何が何だか分りゃしない、本当に！ 理性の目で汚辱と見えるものが、感情の目には立派な美と見えるんだからなあ。一体悪行の中に美があるのかしらん？……

……しかし、人間て奴は自分の痛むことばかり話したがるものだよ。
——ドストエフスキ「カラマーゾフの兄弟」
第三篇の第三、熱烈なる心の懺悔——詩

第一章

「永いあいだ、私は自分が生れたときの光景を見たことがあると言いつ張っていた。それを言い出すたびに大人たちは笑い、しまいには自分がからかわれているのかと思つて、この蒼ざめた子供らしくない子供の顔を、かるい憎しみの色ざした目つきで眺めた。それがたまたま馴染の浅い客の前で言い出されたりすると、白痴と思われかねないことを心配した祖母は険のある声でさえぎって、むこうへ行つて遊んでおいでと言つた。

笑う大人は、たいてい何か科学的な説明で説き伏せようとしたすが常だった。そのとき赤ん坊はまだ目が明いていないのだとか、たとい万一明いていたにしても記憶に残るようなはっきりした観念が得られたはずはないのだとか、子供の心に呑み込めるように砕いて説明してやろうと息込むときの多少芝居がかった熱心さで喋りだすのが定石だった。ねえそうだろう、とまだ疑ぐり深そうにしている私のちいさな肩をゆすぶっているうちに、彼らは私の企らみに危うく掛るところだったと気がつくらしかった。子供だと思つていると油断ができない。こいつ俺を綱にかけて「あのこと」をきき出そうとしてくるにちがいない、それなら何だつてもっと子供らしく無邪気に訊けないものだろう、「僕どこから生れたの？ 僕どうして生れたの？」と。——彼らは、あらためて、黙つたまま、何のせいかしらずひどく心を傷つけられたしるしの薄ら笑いをじつとりとうかべたまま、私を見やるの

が落ちだった。

しかし、それは思ひすぎしというものである。私は「あのこと」などについて何を訊きたいわけでもなかった。それでなくても大人の心を傷つけることが怖くてならなかった私に、繻をかけたたりする策略のうかんでくるはずがなかった。

どう説き聞かされても、また、どう笑い去られても、私には自分の生れた光景を見たという体験が信じられるばかりだった。おそらくはその場に居合わせた人が私に話してきかせた記憶からか、私の勝手な空想からか、どちらかだった。が、私には一カ所だけありありと自分の目で見たとしか思われないうところがあつた。産湯を使わされた盥のふちのところである。下したての爽やかな木肌の盥で、内がわから見ていると、ふちのところにはほんのりと光りがさしていた。そのところだけ木肌がまばゆく、黄金でできてくるようにみえた。ゆらゆらとそこまで水の舌先が舐めるかとみえて届かなかつた。しかしそのふちの下のところの水は、反射のためか、それともそこへも光りがさし入っていたのか、なごやかに照り映えて、小さな光る波同士がたえず鉢合せをしているようにみえた。

——この記憶にとつて、いちばん有力だと思われた反駁は、私の生れたのが昼間ではないということだった。午後九時に私は生れたのであつた。射してくる日光のあろうはずはなかつた。では電燈の光りだつたのか、そうからかわれても、私はいかに夜中だろうと考える背理の一カ所だけは日光が射していなかつたでもあるまいと考える背理のうちへ、さしたる難儀もなく歩み入ることができた。そして盥のゆらめく光りの縁は、何度となく、たしかに私の見た私自身の産湯の時のものとして、記憶のなかに揺曳した。

震災の翌年に私は生れた。

その十年まえ、祖父が植民地の長官時代に起つた疑獄事件で、部下の罪を引受けて職を退いてから（私は美辞麗句を弄しているのではな

い。祖父がもつていたような、人間に対する愚かな信頼の完璧さは、私の半生でも他に比べられるものを見なかつた。）私の家は殆ど鼻歌まじりと言いたいほどの気楽な速度で、傾斜の上を這りだした。莫大な借財、差押、家屋敷の売却、それから窮迫が加わるにつれ暗い衝動のようになすますもえさかる病的な虚栄。——こうして私が生れたのは、土地柄のあまりよくない町の一角にある古い借家だった。こけおどかしの鉄の門や前庭や場末の礼拝堂ほどにひろい洋間などのある・坂の上から見る・二階建てであり坂の下から見ると三階建ての・燻んだ暗い感じのする・何か錯雑した容子の居丈高な家だった。暗い部屋がたくさんあり、女中が六人いた。祖父、祖母、父、母、と都合十人がこの古い簞笥のようにきしむ家に起き伏ししていた。

祖父の事業慾と祖母の病氣と浪費癖とが一家の悩みの種だった。いかがわしい取巻き連のもつてくる絵図面に誘われて、祖父は黄金夢を夢みながら遠い地方をしばしば旅した。古い家柄の出の祖母は、祖父を憎み蔑んでいた。彼女は狷介不屈な、或る狂おしい詩的な魂だった。痼疾の脳神経痛が、遠まわしに、着実に、彼女の神経を蝕んでいた。同時に無益な明晰さをそれが彼女の理智を増した。死にいたるまでつづいたこの狂燥の発作が、祖父の壮年時代の罪の形見であること誰が知っていたか？

父はこの家で、かよわい美しい花嫁、私の母を迎えた。

大正十四年の一月十四日の朝、陣痛が母を襲つた。夜九時に六五〇匁の小さい赤ん坊が生れた。フランネルの襦袢・クリームいろの羽二重の下着・お召の緋の着物を着せられたお七夜の晩、祖父が一家の前で、奉書の紙に私の名を書き、三方の上のせ、床の間に置いた。

髪がいつまでたつても金色だった。オリウ油をしじゅうつけているうちに黒くなった。父母は二階に住んでいた。二階で赤ん坊を育てるのは危険だという口実の下に、生れて四十九日目に祖母は母の手から私を奪いとつた。しじゅう閉て切つた・病氣と老いの匂いにむせか

える祖母の病室で、その病床に床を並べて私は育てられた。

生れて一年たつたたぬに、私は階段の三段目から落ちて額に傷を負った。祖母は芝居へ行っており、父の従兄妹たちが母もともどもに息抜きにさわいでいた。母がふと二階へ物をとりに行った。その母を追って行って、おひきずりの着物の裾がひっかかって、落ちたのである。

歌舞伎座へ呼出しがかけられた。祖母はかえって来て玄関に立ったまま、右手の杖に体を支えて、出迎えた父をじっと見つめたまま妙に落着いた一字一字を彫りつけるような口調で言った。

「もう死んだのかっ？」

「いいや」

祖母は巫子のような確信のある足取りで家へ上って来た。……

——五歳の元日の朝、赤いコーヒー様のものを私は吐いた。主治医が来て「受けあえぬ」と言った。カンフルや葡萄糖が針差のように打たれた。手首も上膊も脈が触れなくなつて二時間がすぎた。人々は私の死体を見た。

経帷子や遺愛の玩具がそろえられ一族が集まった。それから一時間ほどして小水が出た。母の兄の博士が「助かるぞ」と言った。心臓の働らきかけた証拠だというのである。ややあって又小水が出た。徐々に、おぼろげな生命の明るみが私の頬によみがえつた。

その病氣——自家中毒——は私の痼疾になった。月に一回、あるいは軽いあるいは重いそれが私を訪れた。何度となく危機が見舞つた。私に向かつて近づいてくる病氣の聲音で、それが死と近い病氣であるか、それとも死と疎遠な病氣であるかを、私の意識は聴きわけようになつた。

最初の記憶、ふしぎな確たる影像で私を思い悩ます記憶が、そのあたりではじまつた。

手をひいてくれていたのは、母か看護婦か女中かそれとも叔母か、それはわからない。季節も分明でない。午後の日ざしがどんよりその坂をめぐる家々に射していた。私はそのだれか知らぬ女の人に手を引かれ、坂を家の方へのぼって来た。むこうから下りて来る者があるので、女は私の手を強く引いて道をよけ、立止つた。

この影像は何度となく復習され強められ集中され、そのたびごとに新たな意味を附されたものであることはまちがいが無い。何故なら、漠とした周囲の情景のなかで、その「坂を下りて来るもの」の姿だけが不当な精密さを帯びているからだ。それもそのはず、これこそ私の半生を悩まし脅かしつづけたものの、最初の記念の影像であつたからだ。

坂を下りて来たのは一人の若者だつた。肥桶を前後に荷い、汚れた手拭で鉢巻をし、血色のよい美しい頬と輝やく目を持ち、足で重みを踏みわけながら坂を下りて来た。それは汚穢屋——糞尿汲取人——であつた。彼は地下足袋を穿き、紺の股引を穿いていた。五歳の私は異常な注視でこの姿を見た。まだその意味としては定かではないが、或る力の最初の啓示、或る暗いふしぎな呼び声が私に呼びかけたのであつた。それが汚穢屋の姿に最初に顕現したことは寓喩的である。何故なら糞尿は大地の象徴であるから、私に呼びかけたものは根の母の悪意ある愛であつたに相違ないから。

私はこの世にひりつくような或る種の欲望があるのを予感した。汚れた若者の姿を見上げながら、「私が彼になりたい」という欲求、「私が彼でありたい」という欲求が私をしめつけた。その欲求には二つの重点があつたことが、あきらかに思い出される。一つの重点は彼の紺の股引であり、一つの重点は彼の職業であつた。紺の股引は彼の下半身を明瞭に輪郭づけていた。それはしなやかに動き、私に向つて歩いてくるように思われた。いわん方ない傾倒が、その股引に対して私に

起った。何故だか私にはわからなかった。

彼の職業——。このとき、物心つくと同時に他の子供たちが陸軍大將になりたいと思うのと同じ機構で、「汚穢屋になりたい」という。これが私に泛んだのであった。憧れの原因は紺の股引にあったとも謂われようが、そればかりでは決してなかった。この主題は、それ自身私の中で強められ発展し特異な展開を見せた。

というのは、彼の職業に対して、私は何か鋭い悲哀、身を擦るような悲哀への憧れのようなものを感じたのである。きわめて感覚的な意味での「悲劇的なもの」を、私は彼の職業から感じた。彼の職業から、或る「身を挺している」と謂った感じ、或る投げやりな感じ、或る危険に対する親近の感じ、虚無と活力とのめざましい混合と謂った感じ、そういうものが溢れ出て五歳の私に迫り私をとりこにした。汚穢屋という職業を私は誤解していたのかもしれない。何か別の職業を人から聞いていて、彼の服装でそれと誤認し、彼の職業にむりやりにはめ込んでいたのかもしれない。そうでなければ説明がつかない。

なぜならこの情緒と同じ主題が、やがて、花電車＊の運転手や地下鉄の切符切りの上へ移され、私の知らない・又そこから私が永遠に排除されているように思える「悲劇的な生活」を彼らから強烈に感受させられたからだ。とりわけ、地下鉄の切符切りの場合は、当時地下鉄構内に漂っていたゴムのような薄荷はろのような匂いが、彼の青い制服の胸に並んだ金釦かんとくと相俟あひまって、「悲劇的なもの」の聯想を容易に促した。そういう匂いの中で生活している人のことを、何故かしら私の心に「悲劇的」に思わせた。私の官能がそれを求めしかも私に拒まれてくる或る場所で、私に關係なしに行われる生活や事件、その人々、これらが私の「悲劇的なもの」の定義であり、そこから私が永遠に拒まれていくという悲哀が、いつも彼ら及び彼らの生活の上に転化され夢みられて、辛うじて私は私自身の悲哀を通して、そこに与らうとしてくるものらしかった。

とすれば、私の感じだした「悲劇的なもの」とは、私がそこから拒まれていくこと、遑早い予感いらいはがもたらした悲哀の、投影にすぎなかったのかもしれない。

もう一つの最初の記憶がある。

六つときには読み書きができた。その絵本がよめなかつたとする、やはり五つの年の記憶に相違ない。

そのころ数ある絵本のなかのただ一冊、しかも見ひらきになっているただ一枚の絵が、しつこく私の偏愛に翹たかっていた。私はそれを見つめてみると永い退屈な午後を忘れてることができ、しかも人がやって来ると何がなしにうしろめたくてあわてて別のページをあけた。看護婦や女中のお守りが私には煩わづわしくてならなくなった。一日その絵に見入っていられる生活がしたいと思った。その頁をあけるときは胸がときめき、他の頁を見ても心はそらだつた。

その絵というのは白馬にまたがって剣をかざしているジャンヌ・ダルク＊であった。馬は鼻孔を怒らし、逞たくまましい前肢で砂塵を蹴立けていた。ジャンヌ・ダルクが身に着けた白銀の鎧よろいには、何か美しい紋章があった。彼は美しい顔を顔当あたまから覗かせ、凛々しく披身ひしんを青空にふりかざして、「死」へか、ともかく何かしら不吉な力をもった翔とびゆく対象へ立ち向っていた。私は彼が次の瞬間に殺されるだろうと信じた。いそいで頁をめくったら、彼の殺されている絵が見られるかもしれない。絵本の絵は何かの加減でしらない間に「次の瞬間」へ移っていることがあるかもしれない……

しかしあるとき看護婦が、何気なしにその絵の頁をひらきながら、横でちらちら盗み見ている私に言った。

「お坊ちゃま、この絵のお話御存知？」

「しらないの」

「この人男みたいでしょう。でも女なんですよ、本当は。女が男のな

りをして戦争へ行ってお国のためにつくしたお話ですよ」
「女なの」

私は打ちひしがれた気持だった。彼だと信じていたものが彼女なのであった。この美しい騎士が男でなくて女だとあっては、何になろう。(現在も私には女の男装への根強い・説明しがたい嫌悪がある。)それはとりわけ彼の死に対して私の抱いた甘い幻想への、残酷な復讐、人生で私が出逢った最初の「現実からの復讐」に似ていた。美しい騎士の死の讃美を、後年、私はオスカア・ワイルドの次のような詩句に見出した。

葦と闇のなかに殺され横たわる、
騎士はうつしくし。……

それ以来、私はその絵本を見捨てた。手にとることもしなかった。ユイスマンは小説「彼方」のなかで、「やがて極めて巧緻な残酷さと微妙な罪惡に一転すべき性質のものなりし」ジル・ド・レニの神秘的衝動は、シャルル七世の勅によって彼がその護衛の任に当たったジャンヌ・ダルクのさまざまな信じ難い事蹟を目のあたり見る事によって涵養された、と説いている。逆の機縁、(つまり嫌悪の機縁として)ではあるが、私の場合も、オルレアンの少女が一役買っているのだった。

——さらに一つの記憶。

汗の匂いである。汗の匂いが私を駆り立て、私の憧れをそそり、私を支配した。……

耳をすましている、と、ザックザックという混濁した・ごく微かな・おびやかすような響きがきこえてくる。時として喇叭がまじり、単純な・ふしぎに哀切な歌声が近づくと、私は女中の手を引き、はやくはや

くと急ぎ立て、女中の胸に抱かれて門のところ立つことへ心をいそがせた。

練兵からかえるさの軍隊が、私の門前をとおるのだった。私はいつも子供好きな兵士から、空になった薬莢をいくつかもらうのをたのしみにしていた。祖母が危険だといってそれを貰うことを禁じたので、このたのしみには秘密のよろこびが加わった。鈍重な軍靴のひびきや、汚れた軍服や、肩にかついだ銃器の林は、どの子供をも魅し去るに十分である。しかし私を魅し、かれらから薬莢をもらおうというたのしみのかくれた動機をなしていたのは、ただかれらの汗の匂いであつた。

兵士たちの汗の匂い、あの潮風のような・黄金に炒られた海岸の空氣のような匂い、あの匂いが私の鼻孔を搏ち、私を酔わせた。私の最初の匂いの記憶はこれかもしれない。その匂いは、もちろん直ちに性的な快感に結びつくことはなしに、兵士らの運命・彼らの職業の悲劇性・彼らの死・彼らの見るべき遠い国々、そういうものへの官能的な欲求をそれが私のうちに徐々に、そして根強く目ざめさせた。

……私が人生ではじめて出逢ったのは、これら異形の幻影だった。それは実に巧まれた完全さをもって最初から私の前に立ったのだ。何一つ欠けているものもなしに。何一つ、後年の私が自分の意識や行動の源泉をそこに訪ねて、欠けているものもなしに。

私が幼時から人生に対して抱いていた観念は、アウグスティヌス風な予定説の線を外れることがたえてなかった。いくたびとなく無益な迷いが私を苦しめ、今もなお苦しめつづけているものの、この迷いを一種の墮罪の誘惑と考えれば、私の決定論にゆるぎはなかった。私の生涯の不安の総計のいわば献立表を、私はまだそれが読めないうちから与えられていた。私はただナブキンをかけて食卓に向つていればよかった。今こうした奇矯な書物を書いていることすらが、献立表に

はちゃんと載せられており、最初から私はそれを見ていたはずであつた。

幼年時代は時間と空間の紛糾した舞台である。たとえば火山の爆発とか叛乱軍の蜂起とか大人から告げられた諸国のニュースと、目前で起っている祖母の発作や家のなかのこまごました静いごとと、今しがたそこへ没入していたお伽噺の世界の空想的な事件と、これら三つのものが、いつも私には等価値の、同系列のものに思われた。私にはこの世界が積木の構築以上に複雑なものとは思えず、やがて私がそこへ行かねばならぬいわゆる「社会」が、お伽噺の「世間」以上に陸離たるものとは思えなかつた。一つの限定が無意識裡にはじまつていた。そしてあらゆる空想は、はじめから、この限定へ立向う抵抗の下に、ふしぎに完全な・それ自体一つの熱烈な願ひにも似た絶望を、滲ませていた。

夜、私は床の中で、私の床の周囲をとりまく闇の延長上に、燦然たる都会が泛ぶのを見た。それは奇妙にひっそりして、しかも光輝と秘密にみちあふれていた。そこを訪れた人の面には一つの秘密の刻印が捺されるに相違なかつた。深夜家へ帰ってくる大人たちは、かれらの言葉や挙止のうちに、どこかしら合言葉めいたもの・フリーメイソンのじみたものをのこしていた。また彼等の顔には、何かきらきらした・直視することの憚られる疲労があつた。触れる指さきに銀粉をのこすあのクリスマススの仮面のように、かれらの顔に手を触れれば、夜の都会がかれらを彩る絵具の色がわかりそうに思われた。

やがて、私は「夜」が私のすぐ目近で帷をあげるのを見た。それは松旭斎天勝の舞台だつた。(彼女がめずらしく新宿の劇場に出た時だつたが、同じ劇場で何年かあとに見たダンテという奇術師の舞台は、天勝のそれよりも数層倍大がかりなものであつたのに、そのダンテも、また万国博覧会のハーゲンベック・サーカスも、最初の天勝は

どに私を愕かしはしなかつた。)

彼女は豊かな肢体を黙示録の大淫婦めいた衣裳に包んで、舞台の上をのびやかに散歩した。手妻使い特有の亡命貴族のような勿体ぶつた鷹揚さと、あの一種沈鬱な愛嬌と、あの女丈夫らしい物腰とが、奇妙にも、安物のみが発する思い切つた光輝に身を委ねた贗造の衣裳や、女浪曲師のような濃厚な化粧や、足の爪先まで塗つた白粉や、人工宝石の堆い瑰麗な腕環などと、或るメランコリックな調和を示していた。むしろ不調和が落す陰翳の肌理のこまかさ、独特の諧和感をみちびいて来ていたのだ。

「天勝になりたい」というねがいが、「花電車の運転手になりたい」というねがいと本質を異にするものであることが、おぼろげながら私にはわかつていた。そのもつとも顯著な相違は、前者には、あの「悲劇的なもの」への渴望が全くと言ってよいほど欠けていたことだ。天勝になりたいという希みに対しては、私のあの憧れと疾ましさと苛ながら、私はある日母の部屋へ忍び込んで衣裳箆筒をあげたのであつた。

母の着物のなかでいちばんごてごてした・きらびやかな着物が引摺り出された。帯は油絵具で緋の薔薇が描かれたものを、土耳古の大官のようにぐるぐる巻きにした。ちりめんの風呂敷で頭が包まれた。鏡の前に立つてみると、この即興の頭布の具合は、「宝島」に出てくる海賊の頭布に似ているように思われたので、私は狂おしい喜びで顔をほてらせた。しかし私の仕事はまだまだ大変だつた。私の一挙一動、私の指先爪先までが、神秘を生むにふさわしいものでなければならなかつた。私は懐中鏡を帯のあいだにはさみ、顔にうすく白粉を塗つた。それから棒状をした銀いろの懐中電燈や、古風な彫金を施した万年筆や、何にまれまぶしく目を射るものをすべて携へた。

こうして私は、まじめくさつて祖母の居間へ押し出した。狂おしい

可笑しき・うれしさにこらえきれず、
「天勝よ。僕、天勝よ」

と言いながらそら中を駆けまわった。

そこには病床の祖母と、母と、誰か来客と、病室づきの女中とがいた。私の目には誰も見えなかった。私の熱狂は、自分が扮した天勝が多く目の目にさらされているという意識に集中され、いわばただ私自身をしか見ていなかった。しかしふとした加減で、私は母の顔を見た。母はこころもち青ざめて、放心したように坐っていた。そして私と目が合うと、その目がすつと伏せられた。

私は了解した。涙が滲んで来た。

何をこのとき私は理解し、あるいは理解を迫られたのか？「罪に先立つ悔恨」という後年の主題が、ここでその端緒を暗示してみせたのか？それとも愛の目のなかに置かれたときにいかほど孤独がぶざまに見えるかという教訓を、私はそこから受けとり、同時にまた、私自身の愛の拒み方を、その裏側から学びとったのか？

——女中が私を取押えた。私は別の部屋へつれて行かれ、羽毛をむしられる。鶏のように、またたくひまにこの不埒な仮装を剥がされた。

扮装慾は活動写真を見はじめることと昂進した。それは十歳ごろまで顯著につづいた。

あるとき私は書生と「フラ・ディアポロ」という音楽映画をみに行った。ディアポロに扮した役者の、袖口に長いレエスをひるがえした宮廷服が忘れられなかった。僕ああいうの着たいな。あんな鬘かぶつてみたいな、と私が言うのと、書生は軽蔑したような笑い方をした。そのくせ彼がよく女中部屋で八重垣姫の真似をしてみせて女中たちを笑わせていたことを私は知っていた。

しかし天勝につづいて私を魅したのはクレオパトラであった。ある

年の暮ちかい雪の日に、親しい医者が私にせがまれて、その活動写真へ私を連れて行った。暮のことでお客は少なかつた。医者は手摺に足をのせて眠ってしまった。——ひとり私は耽奇の目で眺めていた。大ぜいの奴隷に担がれた古怪な臺台に乗って羅馬へ乗りこむ埃及の女王を、險全体にアイ・シャドウを塗った沈鬱な目つきを。その着ていた超自然な衣裳を。それからまた、波斯絨毯のなから現われたその琥珀いろの半裸の姿を。

私は、今度は祖母や父母の目をぬんすで、(すでに十分な罪の歎きをもって)妹や弟を相手に、クレオパトラの扮装に憂身をやつした。何を私はこの女装から期待したのか？ 後になって、私は私と同様の期待を、羅馬顔廓期の皇帝、あの羅馬古神の破壊者、あのデカダンの帝王獣、ヘーリオガバルスに見出だした。

こうして私は二種類の前提を語り終えた。それは復習を要する。第一の前提は、糞尿汲取人とオルレアン少女と兵士の汗の匂いとである。第二の前提は、松旭斎天勝とクレオパトラだ。なお語られねばならない前提が一つある。

子供に手のとどくかぎりのお伽噺を涉猟しながら、私は王女たちを愛さなかつた。王子だけを愛した。殺される王子たち、死の運命にある王子たちは一層愛した。殺される若者たちを凡て愛した。

しかし私にはまだわからなかつた。何だつて数あるアンデルセン話のなから、あの「薔薇の妖精」の、恋人が記念にくれた薔薇に接吻しているところを大きなナイフで悪党に刺し殺され首を斬られる美しい若者だけが、心に深く影を落すのかを。なぜ多くのワイルドの童話のなかで、「漁夫と人魚」の、人魚を抱き緊めたまま浜辺に打ち上げられる若い漁夫の亡骸だけが私を魅するののかを。

勿論、私は他の子供らしいものをも十分に愛した。アンデルセンで

好きなのは「夜鶯」であり、また、子供らしい多くの漫画の本を喜んだ。しかしともすると私の心が、死と夜と血潮へむかってゆくのを、遮（さまた）げることではできなかつた。

執拗（しつごう）に、「殺される王子」の幻影は私を追った。王子たちのあのタイツを穿いた露わな身装と、彼らの残酷な死とを、結びつけて空想することが、どうしてそのように快（た）いのか、誰が私に説き明してくれることができよう。ここに一つのハンガリーの童話がある。原色刷の、きわめて写実的なその挿絵は、永いあいだ私の心を虜にした。

挿絵の王子は、黒のタイツに、その胸には金糸の刺繍を施した薔薇色の上着を着け、紅い裏地をひるがえした濃紺のマントを羽織り、緑と黄金のベルトを腰に巻いていた。緑金の兜、真紅の太刀、緑草の矢筒が彼の武装であった。その白革の手袋の左手には弓をもち、右手は森の老樹の梢（せき）にかけ、凍々しい沈痛な面持で、今しも彼に襲いかかろうと狙っている竜の怖ろしい口を見下ろしていた。その面持には、死の決心があった。もしこの王子が竜退治の勝者としての運命を荷（お）っていたのだとしたら、いかほど私に及ぼす靈惑は薄らいだことであらう。しかし、幸いなことに、王子は死の運命を荷（お）っているのだ。

遺憾ながらこの死の運命は十全のものではなかつた。王子は妹を救いまた美しい妖精の女王と結婚するために、七度の死の試練に耐えるのだったが、口に含んだダイヤモンドの魔力のおかげで、七度が七度ともよみがえり、成功の幸福をたのしむに至るのである。右の絵は第一の死——竜に噛み殺される死——の直前の光景だつた。そのうち彼は、「大きな蜘蛛につかまれて、毒の汁を体中に刺し込まれて、がつかつ喰われ」たり、水に溺れて死んだり、火で焼かれたり、蜂や蛇に刺されたりかまれたり、大きな尖つた刀が数しれぬほど一面の切尖を並べてぎっしり植っている穴に身を投じたり、「大雨のように」無数に降りかかる大石に打たれて死んだりした。

「竜に噛まれる死」の件りはわけても巨細に、こんな風に書かれていた。

「竜はすぐに、がりがりと王子をかみくだきました。王子は小さくかみ切られる間は、痛くて痛くてたまりませんでした。王子は小さくこらえて、すっかりきれぎれにされてしまいますと、またふいに、もとの体になって、ひらりと口の中から飛び出しました。体にはかすれ傷一つついておりません。竜は、その場へ倒れて死んでしまいました」

私はこの箇所を百遍も読んだ。しかし看過してはならない欠陥だと思われたのが、「体にはかすれ傷一つついておりません」という一行であつた。この一行を読むと私は作者に裏切られたと感じ、作者は重大な過失を犯していると考えた。

やがて何かの加減で、私は一つの発明をした。それはここを読むときに、「またふいに」から、「竜は」までを手で隠して読むことだつた。するとこの書物は理想の書物の姿を具現した。それはこう読まれた。……

「竜はすぐに、がりがりと王子をかみくだきました。王子は小さくかみ切られる間は、痛くて痛くてたまりませんでした。それをじつとこらえて、すっかりきれぎれにされてしまいますと、その場へ倒れて死んでしまいました」

——こうしたカットの仕方から、大人たちは背理を読むであろうか？ しかしこの幼ない・傲慢な・おのれの好みに感傷しやうい検閲官は、「すっかりきれぎれにされて」という文句と、「その場へ倒れて」という文句との、明らかな矛盾はわきまえながら、なお、そのどちらをも捨てかねたのであつた。

一方また、私は自分が戦死したり殺されたりしている状態を空想することに喜びを持った。そのくせ、死の恐怖は人一倍つよかつた。女